跡見学園女子大学学芸員課程
2022年度博物館実習について

跡見学園女子大学 学芸員課程主任 教授
村田　宏

令和4年度の博物館実習の概要はつぎの通りである。

⑴ 春学期における、通常授業時の基礎実習、一日の行程で実施する見学実習
⑵ 夏期休暇期間を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習
⑶ 秋学期における花蹊記念資料館を使用した事後実習

＊＊

（1）春学期における、通常授業時の基礎実習、一日の行程で実施する見学実習

年度当初の見学実習は、東京都現代美術館（〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1）で行われた。その主たる内容は、岡村恵子（学芸員）さんによる東京都現代美術館の概要についてのレクチャーと郷泰典（教育普及係長）氏によるバックヤード参観だった。ご多用中のところご協力いただいた岡村氏と郷氏に心より感謝申し上げる。学芸員課程履修生にとって大変貴重な体験となった。

参加者のレポートのいくつかを以下に記しておこう。

A.T.生

学芸員課程の学習の一環として、東京都現代美術館を訪れた。前半は、バックヤードを見学した。普段は目にすることができない場所であるため、どの部分も大変興味深いものであったが、その中でも特に強く印象に残った点が三つある。一つ目は、搬入口である。展示するための美術品を輸送する大型トラックが出入りするため、広々としていた点が印象的だった。ここには、外側と内側の二箇所に大きなシャッターが設置されていた。美術品を搬入する際は必ず片方のみを開けた状態になり、両方が開いている状態になることは避けるようだ。これは、外気の侵入によって温湿度が変化することを防ぐためである。博物館や美術館で資料を保存する際は温湿度の管理が重要であると、今まで受講した授業で幾度も耳にした。今回の見学で、実際にその現場を目にすることで、資料の保存・管理において様々な工夫が凝らされていることを実感した。二つ目は、巨大なエレベーターである。館内で美術品等を運搬する際に使用されるため、大学等にあるような通常のエレベーターと比較すると、幅や高さ、奥行きが倍以上あった。美術館に展示される作品には、一般的な人間の身長よりも遥かに高い彫刻や絵画も多数含まれるため、このように大きな造りになっているのだろう。また、エレベーターが動いている際も振動が全く感じられなかった。美術品は微かな振動によって破損する恐れがあるため、静かに動作する仕組みになっているのだろう。三点目は、美術館内の至る所に設置された、虫を捕獲するための箱である。郷さんが説明してくださったが、館内に入ってきた虫を調査するためのものであるようだ。収蔵品は、虫害を防ぐことも考えて保存・管理しなければならない。特に、美術品の中でも絵画や染織品等は、虫食い等の被害を受ける可能性がある。どのような虫がいるのかを知り、どのようにして虫から美術品を守るのかを考えるために設置されたものであると知った。収蔵庫の入り口にも、靴裏の粉塵等を除去するための粘着マットが床上に設置されていた。これは、埃による資料の劣化だけでなく、虫害を防ぐための工夫でもあるのだろう。収蔵品を守るために、館内の様々な場所で工夫が施されて

いることがわかった。

後半は、岡村さんによる講義を受けた。特に印象に残ったのは、東京都現代美術館の収蔵品についての解説である。総点数5,569点もの収蔵品があり、その内約3,000点は現在の東京都美術館から移管されたもの、約2,500点は東京都現代美術館として収集したものだ。それらの中で最も多いものは版画で、これは現代美術を主に取り扱う美術館であることを示しているだろう。近年は模写や下絵、図書資料や映像等の二次資料も増加しているようだ。団体での見学後、個人的に「光みつる」展（2022年3月19日～6月19日）を鑑賞したが、この展覧会の中でも作家の下絵や映像が展示されていた。これらは、現代美術だからこそ収集できる資料だろう。現代美術は、今後も増加していくことが予想される。それらの作品を保存することが、東京都現代美術館の役目の一つなのだと思った。

今回の見学では、学芸員課程の授業の中で学んだことを実際に体感できる場面が多くあった。収蔵品は厳重に管理された環境に置くことで、長い年月をかけて保存することができる。私自身も、今後、博物館実習を行う際には、貴重な資料に触れる機会が訪れるだろう。決して軽率に扱うことはせず、しっかりと資料に向き合うことが大切であると感じた。

Y.F.生

学芸員の方のお話や普段は見ることのできないバックヤード見学など、とても貴重な体験をさせて頂いた。初めて知ったこと、あらためて実感できたことが数多くあり勉強になった。

東京都現代美術館には何度か訪れたことはあった。大きな道路を目の前に圧倒的な存在感を放つ四角いフォルムの建物は、近代的かつ時代がたっても色あせることのない独特な美しさを感じる。まさに現代美術館らしく、いつ見ても“かっこいい”建物である。そんな美術館のバックヤードを見学して学んだことを述べる。

まず受付のある階から関係者しか立ち入れない下の階に降りると、窓の外に、高い壁に囲まれた広い空間が見えた。美術館の中に入る前（つまり1階であるはずの場所）に外で同じように開けた広い空間を目にしていたので一瞬脳が混乱した。現代美術館の構造の複雑さをここであらためて感じた。職員の方に案内していただきながら作品を保存している収蔵庫のある場所へ行くと、少し涼しさを感じた。これは授業で学習した作品のための温度管理がなされているからではないかと感じた。そして次に収蔵庫の大きさに驚いた。資料で収蔵庫の写真を見たことはあったが、私が想像していたものよりも大きかった。扉の鍵となる暗証番号は一定の職員しか知らず、その番号も口伝えによるもので、自分で覚えていなくてはならないということも初めて知り、かなりの厳重さに作品の価値の高さを改めて感じた。また、作品を運搬するエレベーターも天井高く非常に広い空間で少しの振動も感じず、作品への影響に配慮した造りになっていることがわかった。そのほかにも美術館内に置いている椅子や備品のこだわりなども聞くことができ、来館者を第一に考えて試行錯誤されていることが窺えた。

次に学芸員の方のお話を聞いた感想を述べる。

東京都現代美術館の成り立ちやコレクションについてなどのお話を聞かせていただいた中で、東京都美術館から移管された作品も含まれていることを初めて知った。企画展を行う上で美術館同士が作品を貸し借りすることは大前提であると考えるが、美術館をオープンするにあたっても既存の美術館から作品を移管することで芸術に触れられる新たな場所を全員で作り上げていることが改めて感じられた。そして東京都現代美術館の特色である多くの海外作品のコレクションも印象的だった。日本の作品だけでなく海外の作品にも触れることで国によって違った芸風や流行なども捉えられ、多くの刺激を受けることができる。それは日本と他の国を比べて鑑賞することで芸術に対する固定概念がなくなり、さらに幅広い視野で作品に触れられる可能性を広げることにつながると考えた。

以上が東京都現代美術館の見学で私が強く感じたこと、学んだことである。普段来館者側でしか見ていない部分が裏でどのように支えられて成り立っているのかをよく理解することができ、美術館の成り立ちやコレクションへの思いを知って美術館はどうあるべきなのかということを改めて考える機会となった。

S.M.生

私は、博物館の裏側を見学したことはなかった。小学生のことから博物館に行くことは何度もあったが、裏側を見ることができるツアーやイベントには参加したことがなかった。今回が初めてのバックヤード見学となったというわけである。自分がイメージしていたバックヤードは、もっと狭くて暗いイメージがあったが、東京都現代美術館のバックヤードはそのイメージ違って、とてもきれいで広いという印象を持った。器材がたくさん置いてあったが、私たちがグループで通っても余裕があった。

バックヤード見学で特に印象に残っているのは収蔵庫の大きな扉とそれより大きなエレベーターである。収蔵庫の中は見ることができなかったが、扉にはドラマやアニメで見る大きな金庫のようなハンドルがついていて、厳重な造りになっていた。大きな作品もあるため、扉も大きく設計されているというお話を伺った。たしかに、美術館や博物館で展示されている作品は必ずしも

小さいというわけではない。まず入り口が入らなければ保管することはできないので、入り口は大きくある必要がある。そう考えると入り口が大きいのは当然なのだが、最初見た時はその大きさに驚いた。収蔵庫はいくつかあり、そのうちのひとつは本来収蔵庫を作る予定ではなかったところに作ったとのことだった。それでも大きさを確保できているのだからすごいと思う。今まで展示した作品の中で、あの大きな扉がギリギリだったものがあれば見てみたい。同じ理由で、エレベーターも大きなものだった。エレベーターには乗せていただけたが、広すぎてエレベーターに乗っているという感覚はなかった。普通では見ないような大きなエレベーターだったが、それでも斜めにしないと乗せられない作品があったというお話を伺った。エレベーターの位置は搬入口からほど近いところにあり、たしかにそんなに大きな作品があるならば、近くに設置しないと運ぶことが難しくなってしまうなと思った。エレベーターや収蔵庫の他には、椅子やソファーなどが収納されている部屋もあった。ソファーも座りやすいものを作るために他の美術館に見に行ったり、椅子も外国の美術館で使われているものを輸入したりと工夫が凝らされていた。普段美術館や博物館に行くときは、作品ばかり見ていて椅子やソファーなどには目を向けていなかった。今度から、椅子やソファーにも目を向けてみようと思った。

他に驚いたのは、図書館とレストランが併設されているところである。地元の博物館には、小さなカフェが併設されている博物館があるが、しっかりとしたレストランが併設されているところは初めて見た。図書館も同様である。私が今まで行ったことのある博物館や美術館には、図書館が併設されているところはなかった。

全体のイメージとしては、最先端の美術館であるという印象を持った。立地に合わせた活動や物の配置を工夫しており、街に溶け込んでいる美術館であると思った。

M.S.生

今回の東京都現代美術館の見学ではまず学芸の担当の方から美術館の概要、歴史、収蔵作品についてレクチャーを受けた。お話の中で印象に残ったことは、東京都現代美術館の作品収集の幅広さである。日本の現代美術以外にも友好都市や欧米・アジアの作家の作品も多く収蔵しており、最近では有名作家の作品だけではなく若手、中堅作家の作品も集めているという。また館内で作家が作品を作る「公開制作」を行っていると聞いて、作家と来館者の距離を縮める良い取り組みだと感じた。他にも、80年代後半からは写真や映像作品が増えている、戦時下においても展覧会を行った、など美術館の作品収集の歴史に現代日本の美術の変遷が表れていることを感じた。

見学の後半は教育普及担当の方に美術館のバックヤードを見ながら解説をしていただいた。東京都現代美術館の学芸員はコレクション担当、教育担当、企画担当など分野ごとに分かれているということで、学芸員は分野をまたいで業務を担っている印象だったため少し意外だった。美術館の裏側では作品を保管する最適な環境を保つために様々な工夫がされていた。例を挙げると、外に続くシャッターが二枚あり、必ずどちらか一枚は閉まるようになっている。これは外気が館内に流れ込み温湿度が変化しない為の工夫である。他にも東京都現代美術館は海抜が低いため、水に弱い絵画など平面の作品は3階彫刻などの立体の作品は地下に保管されている。こうした作品を守るための工夫は三年次までに受講した学芸員課程の講義で学んだことである。講義で学んだことが実践されている様子を間近で見ることが出来たのは貴重な学びとなった。見学する中で他館を参考に設備などを改善していることが窺えた。学芸員が海外の博物館や美術館で見つけた“折りたたんで杖にできる椅子”を採用するなど、椅子一つとっても日々最善のものを模索し続けているということに感動した。

バックヤード以外にも美術館の設備についても説明を受けた。図書館やワークショップ、レストランなどが併設されており、美術館が鑑賞だけでなく休憩や食事を楽しんだりできる場になっていたことに感心した。東京都現代美術館は美術館としては珍しく飲食が許可されているスペースがあることに驚いたが、これは近隣にタワーマンションが増えて来観客にファミリー層が増えたからだという。変化する来観客層に合わせて美術館も変化していく必要性を改めて考えさせられた。また、車いすの貸し出しや入り口のスロープ、手話による解説動画の設置などバリアフリーにも気を配っていることも分かった。こうした設備面にも学芸員が関わっていると聞き意外であったが、学芸員の仕事の幅広さを感じた。

東京都現代美術館を見学して、作品を守るため、より多くの来館客に美術館を快適に利用してもらうために学芸員を積み重ねてきたことが分かった。今回感じたことを学んだことをこれからの講義や実習に生かしていきたい。

春学期における基礎実習は、コロナ感染に配慮して対面・遠隔の併用によって実施された。美術資料、民俗資料の取り扱い、写真撮影の基本を中心に行われた（専任教員1名、兼任講師2名）。

****

（2）夏期休暇期間を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習

夏期の学外実習は、以下の14館で行われた（順不同）。各館には懇切丁寧なご指導を賜わった。あらためて御礼申し上げたい。都合により学外実習が行えなかった履修生については、跡見学園女子大学花蹊記念資料館での代替実習の措置を講じた。

群馬県立歴史博物館　埼玉県立近代美術館　流山市立博物館　浦和暮らしの博物館民家園　高崎市タワー美術館
茅ヶ崎市美術館　かみつけの里博物館　埼玉県立歴史と民俗の博物館　板橋区立郷土資料館　東京都江戸東京博物館
古代オリエント博物館　東京富士美術館　山梨県立考古博物館　足立区立郷土博物館

博物館実習学外実習参加者の「実習レポート」を掲載する。

E.W.生

①学修の概要

足立区立郷土博物館では、博物館の概要から始まり、美術・民俗・歴史資料の扱い方や、収蔵資料・収蔵庫の整理、展示準備、燻蒸について学びました。

足立区立郷土博物館の概要では、歴史・民俗の他に美術にも力を入れているということを学びました。また、地域密着型の博物館として地域の方々との関わりを大切にしており、史談会という地域の方々で結成された研究グループと深く関わっていることを知りました。これまでは史談会を通して、調査研究に繋げていることが多かったと仰っていましたが、史談会の方々が高齢化してきているため、今後どのように博物館として活動していくかが課題であるといいます。

資料の扱い方では、収蔵資料の整理も兼ねて調書を取りました。寄贈されている資料が多いことから、足立区立郷土博物館は地域の方々に信頼されているのだと分かりました。

さらに展示準備では、パネル設置やライティングに至る空間作りを学びました。ライティングには展示物を照らすためだけではなく、順路を示す役割や展覧会の雰囲気を左右する効果があるのだと知りました。また、作品を置く位置やキャプションの位置は見やすい高さに設置するのはもちろんですが、位置を工夫することによって注目してもらいたい場所への目線の誘導も行えるのだと学びました。

②実習で最も勉強になったこと

実習で最も勉強になったと感じた点は、作品や資料の扱い方についてです。

私は、博物館実習の目的のひとつとして作品や資料の正しい扱い方を学ぶということを掲げていました。しかし、扱い方といっても様々で、ただ作品や資料を丁寧に取り扱うという事だけではなく、作家やその資料に関わる人の情報の扱い方にも注意しなければならないのだと学びました。これまで私は資料の扱い方に関しては単に正しいしまい方や、触れ方、資料や作品のどこに注目すれば良いかなど外側ばかり気にしていました。ですが、実習を通して、それらには多くの情報が含まれているのだと気づかされました。例えば、文書の中には「○○さんが裁判沙汰になったとき、○○円で解決した」といった内容や、差別的な表現や、そうした絵を含むものもありました。そのため、ただ展示のテーマに関連する資料だからといった理由で展示してしまうと、見る

人を不快な気持ちにさせたり、博物館自体がそういった思考をもった場所だと誤解されてしまいます。また、展示する作品の作家さんがご存命の場合は盗難防止や個人情報漏洩を防ぐために、作家の方の年表を作成する際には細かい情報は明記しないようにするなど配慮が必要なのだと学びました。

よって、作品や資料の扱い方といっても触れ方だけではなく、その資料が持つ情報の扱いにも気をつけなければなりません。

C.I.生

①学修の概要

「浦和くらしの博物館民家園」（以下民家園と表記する）はさいたま市内に残されていた古い民家を移築復元した建造物や生活用具や農具などの展示が多くされている。特に古民家は毎朝と夕方に開館や閉館作業として扉や鍵の開け閉めを毎日行ったが、今ではなかなか見ない木製の格子戸や大戸、雨戸の開閉作業はコツを掴むまでかなり苦戦をした。

7月中は小学生を対象に親子で参加出来る講座の手伝いを行った。この講座では民家園に生えている竹を使用した講座となっており、貯金箱やおもちゃなどを作った。講座の先生はボランティアの方がやっていることが多く、そのサポートに付いている方もボランティアの方が多かったため多くの方とコミュニケーションを取った。前日には予習として試作品を作ったため手順は大体把握しながらサポートをすることが出来た。講座の対象である小学生は2年生から4年生が多く、途中で飽きてしまったりする子もいたためいかに集中力を持たせるかの対応の仕方も工夫する必要があった。

ほぼ毎日していたのが資料整理作業だ。7月中は手分けをして桶作りの道具の収集カード付けを手書きで行ったり、土鈴の写真撮影などを行った。8月は収蔵場所が不明になっていたおよそ600枚の絵葉書の収蔵データの追加作業を行った。途中題がずれていたり間違っていたりするものや、フリガナを入れるために検索で読みを調べたりと一枚一枚手作業でコンピュータに入力した。

また、民家園はさいたま市の小学校の体験学習の受け入れもしており、9月に行う学校が多いため、夏休み期間中は学校の先生との打ち合わせが1日に何校も来るという。1回その打ち合わせに同席させて頂いたが、生徒の人数確認や事前の班分けをお願いしたり、当日の動きの確認をしていた。

最終課題には民家園に建つ古民家の中から一棟選んで一般客を対象にした説明作成し、職員の前で実際に説明を行うというものが出されていた。実際の古民家の解説展示物を見ながらどこを自分の説明に取り入れるか、独自の色を出せるように自分が見て疑問に思ったことを調べて説明案に取り入れた。時間の目安は10分で、ほぼぴったりの10分で説明を終えることが出来たものの、緊張からか早口気味になってしまった。職員の講評ももっと自信を持って話すことが出来ればもっと良いものになったと仰って頂いたため、こうした点は今後の様々な場面でも生かしていきたい。

②実習でもっとも勉強になったこと

博物館の活動で重要だと感じたのはボランティアの方の存在だ。あらゆる活動においてランティアの力は無くてはならないものであると実習を通して感じた。7月に行った講座の講師の多くをボランティアが務め、サポートもしていた。また、民家園の園内には蓮の池や畑などがあり、その整備もボランティアが進んで手伝っているという。さらには小学校の体験学習にも説明役として多くのボランティアが参加しているそうだ。多くの活動を通してボランティアの方がいなければその多くの活動が成り立たなくなってしまうということを知った。

そして限られた予算の中で展示物に工夫をすることも学んだ。ある古民家は元々雑貨を販売していた店で、店棚には空き箱

で作ったダミーの商品を並べて様子を再現していたのだが、新しくそのダミーの商品を段ボールで作った。予算が限られている中で新たに業者に頼んで看板や解説パネルを作ることは沢山出来るわけではないためこのように作れるものは手作りで作るという工夫をしていた。

創意工夫でより当時の様子を伝えるというのは難しいこともあると思うが、限られた予算や材料の中でそれを実際に行っていることは非常に勉強になった。

T.A.生

①学修の概要

板橋区立郷土資料館にて博物館実習を行った。

1日目午前、板橋区や資料館の歴史、学芸員の仕事や資料館の取り組み等について、ガイダンスを通して学んだ。1日目午後から3日目にかけて、7月9日～9月19日開催の企画展「令和4年度 第20回板橋区伝統工芸展 染と織 －真田紐・江戸小紋・江戸手描友禅－」のため、展示作業を行った。この企画展では、板橋区在住の3名の職人の方が作られた作品を中心に展示した。展示品の配置は、担当の学芸員の方からご指導いただきながら、実習生同士が相談して決定した。約2日半という時間をかけ、実習生全員が協力し合ったことで、無事に展示を完成させることができた。4日目午前は、古文書や掛け軸の取り扱いについて、実際に収蔵品を触らせていただきながら学んだ。午後は、主に広報業務を体験した。資料館が運営するTwitterに掲載するための写真を撮影し、宣伝用の文章を考える作業を行った。私は資料館の常設展示室入り口にあるパネルを撮影し、資料館の常設展を宣伝する内容のツイートを投稿した。5日目午前は、板橋区役所の生涯学習課文化財係と板橋区史跡公園（仮）を見学した。特に史跡公園の見学では、江戸時代～戦後の遺構を辿ることができ、貴重な体験となった。また、これらの遺構を今後どのように保存・活用していくか、実習生それぞれが考えた意見を発表した。午後は浮世絵について学び、それぞれの作品をPRするための文章を考えた。6日目は、夏休み期間中に資料館にて行われた「親子兜作り教室」の準備のため、兜作りの材料となるパーツを作成した。細かい作業が多いため、集中力が必要であった。この作業の終了後は、実習生全員が実際に兜を着用するという体験をした。この兜は、資料館が主催する「武者行列」という板橋区の祭りの際に、子どもたちが着用する物であった。7日目午前は、刀の取り扱いについて、実際に本物の刀に触らせていただきながら学んだ。刀は重く、非常に危険であるため、十分に注意して扱う必要があることを実感した。午後は、染織品の取り扱いについて学んだ。資料館に寄贈された打掛の調査を行う中で、描かれた模様や刺繍等から、明治時代頃に作られ、祝事等の場面で使われていた物であることが推測できた。

7日間の実習を通し、多くの貴重な経験を得ることができた。

②実習でもっとも勉強になったこと

実習中に行った企画展の展示作業中に、学芸員の方が仰っていた言葉が、今でも強く印象に残っている。それは、「自分ができないことを知ることも大切。その中で、自分ができることを考えて取り組む」という言葉だ。私は、高い場所が苦手ではないのだが、そこでバランスを取ることが不得意だ。展示作業中、脚立に上って天井にライトを取り付ける作業を行ったが、私はそれを上手くこなすことができず、他の実習生の方に代わってもらった。その時にこの言葉をいただき、私は強く感銘を受けた。自分が不得意なことを無理に行うことで、怪我をする可能性があるだけでなく、展示品や備品の破損等に繋がる恐れもある。自分にできること・できないことを見極め仕事に取り組むことは、学芸員に限らず、様々な職種においても重要になるだろう。秋学期に行う予定の学内実習だけでなく、今後就職して仕事をする中でも、この言葉を忘れず大切にしていきたいと思う。

A.S.生

①学修の概要

埼玉県立歴史と民俗の博物館にて6日間の実習を行った。

まず学修したことの概要であるが、実習では「広報に関する実習」「資料・施設・環境に関する実習」「資料取扱実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「体験学習実習」「展示実習Ⅰ・Ⅱ」を、5人1班のグループで主に行った。

「広報に関する実習」では、企画担当の学芸員の方から博物館の広報活動について説明していただいた。利用者の傾向分析・企画担当の活動・広報の現状と課題点を学ぶとともに、「れきみんクイズ」を作成する実習を行い、ターゲットや「何を伝えたいか」ということを意識する経験を得た。「資料・施設・環境に関する実習」ではIPMに関して学び、収蔵庫の定期清掃とモニタリングを行い、資料収集やIPM関連事業の講義を受けた。学芸員の具体的な仕事を体験し、定期清掃では資料の点検をするだけでなく、資料の状態と場所をしっかり「記録」することの重要性を学んだ。「資料取扱実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」では、Ⅰ歴史・古美術資料、Ⅱ民俗資料、Ⅲ考古資料の取扱について学んだ。大学の授業では扱わなかった土器の梱包作業や、背負い籠や天秤棒・水桶等の民俗資料の体験、民俗資料を使用した体験プログラムの企画・立案・発表を行った。「体験学習実習」では、博物館で開催されている「まが玉作り」と「藍染ハンカチ作り」を実際に体験し、体験学習の課題点と改善方法について検討した。「展示実習Ⅰ・Ⅱ」では、Ⅰ常設展示室の学習と検討、Ⅱ展示の計画・演示を行った。常設展示室を観察し問題点と改善方法の検討・発表、1つの展示ケースを使用し展示企画の計画・キャプション等の作成・展示作業・発表を行った。

②実習でもっとも勉強になったこと

実習において様々な視点を持つ経験がもっとも勉強になった。特に「展示実習Ⅱ」では、様々な視点を持つことの重要性を実感した。展示企画を立てる際には、開催趣旨といった博物側の意図・視点をしっかり持つことはもちろん重要であるが、同時にターゲットの来館者の視点での展示の見やすさ、さらには安全面の視点を持ち資料の配置を考えることを学んだ。自身の班では来館者のターゲット層を子どもに設定したため、子ども視点を持ち、全てのキャプションや解説パネルにふりがなを付け、興味を持たせるような解説パネルを作った。また、来館者の見やすさを考えて斜めの台に資料を配置したが、同時に安全面を考え資料が滑り落ちないように固定する必要性を学んだ。博物館実習では、広い視野を意識する経験がとても勉強になった。

実習では班で活動することが多く、他大学の学生に刺激を受けながら6日間を過ごすことができた。さらに、本物の資料に触れたり多くの実習生の前で発表し、普段の大学生活ではできない経験をして成長することができた。これらの経験は秋学期の授業や、社会人としてのこれからの生活に活かしていきたい。

M.I.生

①学修の概要

流山市立博物館では、初日に流山市内にある文化財を見学した。フィールドワークを行うことで、流山市についての理解を深めることを目的としているのだと感じた。

二日目は実習生で企画展示を行う予定である「流鉄」についての説明と、博物館資料の取り扱いに関する実習を行った。資料の取り扱いでは実際に流鉄に関する紙資料の清掃をした。刷毛でほこりや砂を取り除くという作業は単純ながらも、経年劣化して破れやすいため、一つ一つ慎重に取り扱う必要があった。

三日目は発掘作業と資料の整理作業を行った。発掘調査では実際に地面を削っていき、スコップで掘っていった。地面を削る作業では地面を削るというよりも表面を綺麗にするような作業だった。掘る作業では、四か所に分かれて掘っていった。地面は硬く、かなり力を入れなければ掘っていくことが難しかった。整理作業では土器の欠片を洗った。箱の中の欠片はすべて同じ場所で発掘されたものだが、色や模様がバラバラであった。また以前発掘調査で見つかった土器をいくつか見たが、その中に一切欠けずに発掘された土器があって驚いた。

四日目は地層断面の剥ぎ取りを行った。まず地層の表面を鎌で削っていき、奇麗になった地層を寒冷紗に移していった。寒冷紗に地層を移すことで、半永久的に地層を保存できるそうだ。寒冷紗を張り付けた後、そこに高さや日付、天、地、どこでとれたどの位置の地層なのか書き込んでいった。剥がした地層は最後に水洗いをして余分な土を落としていくのだが、タワシで力を込めて擦っていくことに驚いたが、しっかりと張り付いているため剥がれ落ちることなく、パネルにすることができた。

五日目は展示公開に関する実習を行った。実習生による展示は「流鉄」で、どのような展示を行いたいのか実習生同士で話し合い、大まかなテーマを決めていった。テーマを決めた後、二グループに分かれてそれぞれ分担して作業を行った。展示品一つ決めるのにも、話し合いを行い、展示テーマに沿っているか考えながら作業を進めた。私のグループでは、写真を主に扱ったため一つ一つ確認をしながら、内容にかぶりがないか、どちらの方がより来館者に展示主旨が伝わるかを考えながら選別をした。キャプションについても、電車の愛称にするのか、正式名称にするのか、学芸員の方に相談をしながら決めていった。

六日目は展示実習の続きを行い、展示を完成させた。最後までバタバタとして完璧な出来だとは言い難かったが、この反省を生かしていきたい。

②実習でもっとも勉強になったこと

この実習で一番勉強になったことは展示ひとつにおいても沢山の人が関わっているということを知ったことだ。発掘調査から資料の整理作業、そして展示実習を通じて、人の繋がりや協力がなければ、なにも行うことができないということを、身を持って学ぶことができた。

****

（3）秋学期における花蹊記念資料館を使用した事後実習

秋学期の授業は、花蹊記念資料館を使った模擬展示の企画立案の作業が主たる内容となる。履修者は、歴史・民俗班、美術班に分かれ、企画案を精練させていくが、卒業論文の執筆と重なるなど、厳しいスケジュール管理を強いられながら、しかし、許される範囲で最良の企画案の準備を進めることになる。

博物館実習生模擬展示

歴史民俗班企画

「子供たちの通過儀礼―成長への祈り―」

美術班企画

「水をめぐる美術の冒険」

会　　期	２０２３年1月２４日(火)～２月３日(金)
会　　場	跡見学園女子大学花蹊記念資料館　展示室1・２
開催時間	１０：００～１６：００
休 館 日	土曜日、日曜日、月曜日
主　　催	跡見学園女子大学学芸員課程
入 館 料	無料
入館者数	230名

展示室1

歴史民俗班企画「子供たちの通過儀礼―成長への祈り―」

担当学生名　板垣茉空　井上ちはる　清水麻衣　須澤明歩　寺村彩花　早船絢芽　黛沙也加
三浦優希　渡辺恵未

【 展示概要 】

展示をするにあたって「子供たちの通過儀礼」というテーマに至った理由は、 私たちが経験したことのある通過儀礼や、その他、幼い頃に行われる伝統的な儀礼をもう一度見つめ直そうと考えたからです。そして、それぞれの儀礼の意味を問い直し後世に伝えたいと思い、今回の展覧会を企画しました。

本展示では、子供が誕生する前の妊娠を祝う帯祝いにはじまり、生まれて初めて産土神にお参りするお宮参り、また三歳、五歳、七歳の節目を祝う七五三や大人の仲間入りを祝福する成人式など、子供の誕生から成人するまでを一区切りとし、その間に行われる儀礼について紹介をしていきます。また、通過儀礼といっても様式は様々ありますが、今回の展示では関東の儀礼を中心に取り上げていきます。

序章では端午の節句に飾られた「金太郎」が展示されていますが、これは、人間国宝である二代平田郷陽が制作した貴重な作品で、今回初めて公開致します。今回取り上げた儀礼を通じて、子供たちの成長への祈りや感謝を感じていただけましたら幸いです。

展示室2

美術班企画「水をめぐる美術の冒険」

担当学生名　阿久津紗弥　小平朋佳　鴨打美侑　田中陽菜　戸井田愛悠　長谷川真鈴　古屋雪音

【 展示概要 】

私たちにとって「水」は生きるために必要不可欠な存在であると同時に、古代文明の多くが河川に抱かれて発達したことが示すように人類の文明を生み出す原動力でもありました。こうした「水」を人々はどのように表現してきたのでしょうか。

この展覧会ではギリシャ時代から近代に至る美術の歴史において、我々に身近な存在である「水」がどのように表現され、どのような主題やテーマを持つ作品として受け継がれてきたかを探る内容となっています。